

## 「マルシュの簿記書」に関する一考察

片岡 泰彦

### 第1節 まえがき

クリストファー・コロンプス・マルシュ (Christopher Columbus Marsh) は、アメリカ簿記史上のみならず日本簿記史上、重要な役割を果たした注目すべき人物である。

まずマルシュは、アメリカ簿記史上、初期の時代と言われる「複式簿記導入定着期」<sup>(1)</sup>の1800年代において、単式簿記、複式簿記及び銀行簿記に関する教科書を多数出版し、その名を知られるに至った。さらに、日本においても明治時代の初め、文部省はマルシュの単式簿記と複式簿記の教科書を日本語に翻訳して、小・中学校の簿記教科書としたのである。

ストーンは、「クリストファー・コロンプス・マルシュは、1806年に生誕し、1884年に没した19世紀を代表する有名な簿記書の著者及び教師であった。マルシュは、ニューヨークの74 Cedar Streetで学校を経営し、1830年から1886年の56年間に、5冊の簿記教科書を執筆した。これらの簿記教科書は、アメリカで56版を数え、さらにスペイン語に翻訳された」<sup>(2)</sup>と記述している。さらに、「彼の最初の著書であるThe Science of Double-entry Book-keepingは、1830年にフィラデルフィアで出版され、12版を刊行し、バルチモアでも1版、ニューヨークでも18版を重ねた。Adolphus G. Beckによって翻訳されたスペイン語版は、1849年から1880年にかけて7版刊行された。マルシュは、簿記を最も簡単な事実を詳述した理論の科学であると信じた教師であった。」<sup>(3)</sup>と論述している。

マルシュは、まず第1の単式簿記教科書として、“The art of single-entry book-keeping ; improved by the introduction of the proof of trial-balance &C.” Baltimore, 1832年を出版している<sup>(4)</sup>。そして単式簿記第2の教科書として、“A course of practice in single-entry book-keeping, improved by a proof or balance, and applied to partnership business : ” New York, 1853を公刊している<sup>(5)</sup>。

マルシュの複式簿記第1の教科書は、“The Science of Double-entry Book-keeping, simplified by application of an infallible rule for journalizing : calculated to insure a complete knowledge of the theory and practice of Accounts : ” New York, 1830年である<sup>(6)</sup>。マルシュの複式簿記第2の教科書は、“The Science of Double-entry Book-keeping, simplified by the introduction of an infallible rule for dr. and cr. calculated to insure a complete knowledge of the theory and practice of accounts.” Baltimore, 1831年である<sup>(7)</sup>。そしてマルシュの銀行簿記書としては、“The theory and practice of bank book-keeping, and joint stock accounts ; ” New York, 1856がある<sup>(8)</sup>。

文部省は、小中学校の簿記教科書として、明治8年(1875年)3月と10月に『馬耳蘇氏記簿法』(2冊本)を、そして明治9年(1876年)9月に『馬耳蘇氏複式記簿法』(3冊本)を出版した。これらの本は、マルシュの簿記教科書の原典を小林儀秀が翻訳したものである。

明治8年3月と10月出版の『馬耳蘇氏記簿法』は、単式簿記の解説書であり、上述の単式簿記第2の教科書“A course of practice in single-entry book-keeping”の翻訳である。

明治9年9月出版の『馬耳蘇氏複式記簿法』は、複式簿記の解説書であり、上述の複式簿記第1の教科書“The Science of Double-entry Book-keeping, simplified by application of an infallible rule for journalizing”の翻訳である。

そして大蔵省は、明治6年(1873年)12月に『銀行簿記精法』を出版したが、この文献は、スコットランド人のアレクサンダー・アラン・シャンド(Alexander Allan Shand)が執筆した原文を翻訳・加筆したものとされていた<sup>(9)</sup>。しかるに、この文献の冒頭に示された貸借の規則と銀行簿記の簡単な例題は、上述のマルシュの銀行簿記書“The theory and practice of bank book-keeping,”の冒頭に記述された英文の内容とほぼ同様であったのである<sup>(10)</sup>。筆者はかつて、上述の小林儀秀の翻訳による『馬耳蘇氏記簿法』と『馬耳蘇氏複式記簿法』を考察した<sup>(11)</sup>。ただし、本稿では、この小林訳を参考しつつも、この訳から離れて、マルシュの単式簿記書と複式簿記書の部分的な現代訳を遂行した。そして本稿は、わが国に極めて大きな影響を与えたマルシュの単式簿記書、複式簿記書そして銀行簿記書を比較検討することにより、マルシュ簿記法の内容とその重要性を考察する若干の試みである。

## 第2節 単式簿記書

### I 単式簿記書の構造

マルシュは、単式簿記書の序文 (preface) の冒頭で、単式簿記と複式簿記について次のように述べている。「簿記には、複式簿記と単式簿記の2つの種類がある。複式簿記では、すべての財産が人格化され、人格を持った同等の立場で、債務者 (debtors) と債権者 (creditors) (=借方と貸方) に分類される。一方、単式簿記では、人格を持った財産 (人名勘定=筆者注) のみが、元帳と呼ばれる帳簿に記入される。我々の債権または債務のみが、債務者と債権者 (=借方と貸方) となるのである。複式簿記も単式簿記も、ともに非常に有益な実務上の知識であり、注目されている。複式簿記は、簿記教科書の著者達によって、多くの支持を得ているが、単式簿記には、それが無いのである<sup>(12)</sup>。」

さらにマルシュは、本文の序説 (Introduction) の冒頭で単式簿記について、次のように解説している。「単式簿記の技術は、現在の改良された形では、商売の諸種の取引を組織的に記録することを教え、誤りをなくすのである。それによって、商人は金銭上の利益を知ることができ、自分の主張を実証する能力を保有し、彼の財産を解散時には保護し、彼の商業上の関係や契約を理解できる証拠を残すことができ、満足した状態で彼の商売を解散できるのである<sup>(13)</sup>。」

上述の解説から知る限り、マルシュは、単式簿記を複式簿記と同様に、実務上有益な簿記法と考えたのである。ただし、複式簿記が人的勘定と物的勘定をもって、すべての財産を記録するのに対し、単式簿記では、企業の取引における債権・債務に関する人的勘定を中心に記録する方法と考えたのである。さらに単式簿記は、企業の解散時には適した手段であり、簿記教科書上の簿記法としては、複式簿記に比べて人気の少ないことを指摘している。この内容の詳細については、マルシュのより詳しい説明に従い、以下に論述する。

まずマルシュは、単式簿記に必要な帳簿として、日記帳 (Day-Book)、元帳 (Leger)、現金帳 (Cash Book)、送状控帳 (Invoice Book)、売上帳 (Sales Book)、手形帳 (Bills Book)、船積帳 (Shipment-Book) の7冊をあげている。このうち重要な帳簿は、日記帳、元帳、現金帳、売上帳で、中でも中心となる帳簿は、日記帳と元帳であることを指摘している。さらに試算表 (Trial Balance) と、バランス・シート (Balance Sheet) として貸借対照表、

正式には「資産・負債残高表」(Balances of our Property Debts)の作成を論述している。

日記帳について、マルシュは次のように記述している。「我々に負っているすべての人は債務者である。我々が負っているすべての人は債権者である。そして債務者及び債権者は、日記帳の中で借方または貸方に記帳されるべきである。そして取引が貸方になるか借方になるかの理由が記述される<sup>(14)</sup>。」

マルシュは、日記帳とは債権・債務に関連する人名勘定のみを記録する帳簿と考えた。したがって、日記帳には債権者及び債務者勘定のみが記帳され、他の物的勘定は補助簿に記帳されたのである。元帳について、マルシュは次のように説明している。「日記帳で、債務者または債権者と呼ばれているすべての人的勘定は、元帳に転記されるべきである。そして日記帳の債務者または債権者に記入されている金額もそれぞれ元帳の借方と貸方に転記されるのである<sup>(15)</sup>。」

日記帳に記入された勘定名と金額は、すべて元帳へ転記される。日記帳に記入された勘定は、すべて人名勘定である。したがって、元帳にも人名勘定と金額のみが記入されている。そして元帳には残高勘定と損益勘定が存在せず、期末決算における企業全体の財産状態と損益の内容を元帳では正確に把握することができない。ただし、マルシュは、元帳以外に、現金帳、手形帳、船積帳、財産目録等の補助簿を使って貸借対照表を作成し、この表の中で期末資本と期首資本の差額から純利益を算出しているのである。

マルシュは、バランス・シートである貸借対照表について、次のように説明している。「貸借対照表は、我々の商業上の出来事の状態を示す表である、そして我々のビジネスにおける我々の資産、負債、資本及び純利益を示すものである。貸借対照表は、1年に1回または2回作成されるべきである。貸借対照表では、左側・借方(DR.)に現金勘定及び債権としての人名勘定が示され、右側・貸方(CR.)には支払手形勘定及び債務としての人名勘定と資本金勘定が示される。さらに左側の下段の計算(Calculation)の欄では、資本及び純利益の計算が示されているのである。

## II 単式簿記書の例題

日記帳に示された第1取引は、C.C. Marshが5,000ドル、Jonathan Smithが10,000ドルを会社に出資したことが記録されている。この場合、借方の現金は記録されず、貸方の2人

の人名勘定のみが示される。そして2人から資本金として現金を受取ったことが説明文として示されている。第2取引は、Pettis & Roomeから商品265.60ドルを掛で買入れたことが記録されている。この場合、借方の商品は記録されず、貸方の人名勘定のみが記入される。

元帳には、日記帳に記録された債権者及び債務者の人名勘定と金額が転記されている。すなわち、Christopher C. Marsh、Jonathan Smith、Pettis & Roome、William S. Christman、Hogan & Miller、Isaac Farrington、Hallet & Brown、James Richings、John Stevens他等の勘定科目が記入されている。そして、この勘定科目は、左側・借方(DR.)、右側・貸方(CR.)で、左右貸借対照形式で示されている。例えば、C.C. Marsh勘定については、右側の貸方で出資金としての純資本金5,000ドルと3ヶ月間の純利益506.59ドルが示され、左側の借方には支出金と諸口、商品他等の勘定残高の5,157.61ドルの金額が示されている。

また、Jonathan Smith勘定では、右側の貸方で同じく出資金としての現金10,000ドルが記入され、左側の借方には合計残高10,506.58ドルが記入されている。そしてHogan & Miller勘定では、右側の貸方に商品の売上高が示され、左側の借方にはその商品の売上代金を現金で受取ったことが示されている。

我々の資産及び負債残高表は、現在で言うところの貸借対照表であって、左側・借方には資産勘定が、右側・貸方には負債及び資本勘定が示されている。さらに、左側の下段の計算欄では、期末資本金額16,013.17ドルから期首資本金額15,000ドルを差引いた金額、1,013.17ドルを純利益として算出している。そして1,013.17ドルの2分1ずつである506.58ドルと506.59ドルを、2人の出資者SmithとMarshに配分しているのである。

マルシュが解説した単式簿記は、債権及び債務関係を中心に示す内容を有していたが、財産計算も単純な損益計算も可能な内容を持っていた。その意味では、ドイツのメイスナーが解説した単式簿記とは異なっている<sup>(16)</sup>。したがってマルシュが解説した単式簿記は、複式簿記の補助というようなものではなく、独立した簿記であり、複式簿記を簡略化した簿記と言える。したがって、マルシュのsingle-entry bookkeepingは、簡略式簿記と呼ぶことも可能である。

第1図 単式簿記書の日記帳

ニューヨーク、5月4日 1859年

1

1	<u>C.C. Marsh</u>	貸方(Cr.)	ドル	
	資本金として彼から現金を受取る	-----	5,000	00
1	<u>Jonathan Smith</u>			
	資本金として彼から現金を受取る	-----	10,000	00
	5			
2	<u>Pettis &amp; Roome</u>	貸方		
	商品を彼等から買入、勘定にて送状控帳 17オ-リ	-----	265	60
	7			
3	<u>Hogan &amp; Miller</u>	貸方		
	商品を彼等から買入、勘定にて送状控帳 17オ-リ	-----	59	42
	8			
4	<u>Hallet &amp; Brown</u>	貸方		
	商品を彼等から買入、6ヶ月の掛、送状控帳 27オ-リ	-----	296	36
	11			
5	<u>John Stevens</u>	借方(Dr.)	ドル	
	彼に現金を貸付けた	-----	50	00
	14			
4	<u>Hallett &amp; Brown</u>	借方		
	我々の6ヶ月の約束手形、彼等の為替手形 第8の額に対して-----	-----	296	36
	15			
2	<u>Pettis &amp; Roome</u>	借方		
	現金を彼等に支払う	-----	50	00

第2図 単式簿記書の元帳

1 借方(DR.)				Christopher C. Marsh.				貸方(CR.) 1			
			ドル				ドル				ドル
5月	21日	現金	2	25	00	5月	4日	純資本金	1	5,000	00
6月	10日	現金	8	40	00	7月	31日	純利益	17	506	59
〃	20日	諸口	11	190	80						
〃	22日	商品	12	18	18						
7月	21日	諸口	15	75	00						
〃	31日	残高		5157	61						5506 59
				5506	59	7月	31日	残高			5157 61
借方				Jonathan Smith.				貸方			
			ドル						ドル		
7月	31日	残高		10,506	58	3月	4日	現金	1	10,000	00
						7月	31日	純利益	17	506	58
											10,506 58
				10,506	58	7月	31日	残高			10,506 58



### 第3節 複式簿記書

#### I 複式簿記書の構造

複式簿記書は、前半の複式簿記に関する解説部分と後半の複式簿記の例題からなる。

解説部分の重要事項は、複式簿記の貸借原理、帳簿組織、決算に必要な試算表 (Trial Balance)、財務諸表であるバランス・シート (Balance Sheet) としての貸借対照表、正式には「我々の資産・負債残高表」(Balance of our Assets and Liabilities) と損益計算書 (Balance of our Profit and Losses) の説明である。まず、マルシュは、複式簿記の貸借原理を次の7つの規則でもって論述している<sup>(17)</sup>。

- 第1. 「総て借りる者を以って借方 (debtors) と言うのではなく、独りこれを我に借りる者を以って借方とする。」
- 第2. 「総て貸す者を以って貸方 (creditors) と言うのではなく、独りこれを我に貸す者を以って、貸方とする。」
- 第3. 「どのような取引でも、借方または貸方の生じないものは、その価値はない。」
- 第4. 「物の価値は、ドルとセントをもって計り、物の重量と分量は、ポンド、フィートそしてヤードをもって計る。」
- 第5. 「借方と貸方という用語は、ただ1人の人とか複数の人 (parties) に用いるのみならず、品物及び (取引の) 原因にも応用されるのである。」
- 第6. 「取引をする者は、共に借方なければ貸方なく、貸方なければ借方はないのである。」
- 第7. 「借方の合計と貸方の合計は、いつも必ず等しいかまたはバランスがとれていなければならない。」

次に商業取引上、複式簿記の記録に必要な8冊の帳簿について解説している。主要帳簿としては、日記帳 (Day Book)、仕訳帳 (Journal) そして元帳 (Ledger) の3冊である。そして、補助簿としては、送状控帳 (Invoice Book)、売上帳 (Sales Book)、現金帳 (Cash Book)、下受売上帳 (Commission Sales Book)、手形帳 (Bill Book) の5冊である。

日記帳についてマルシュは、次のように説明している。「この帳簿には、我々のビジネスのすべての取引関係を、明らかに単純に完全にかつ簡潔に示すのである。この帳簿の取引記入の多くの部分は、送状控帳、売上帳、現金帳等から記入されるか構成される。日記



帳は、我々のビジネスの完全なる歴史を我々に残すものなので、すべての帳簿の中で、最も大切なものと考えられるのである。<sup>(18)</sup>」

マルシュは、日記帳を単なるメモ帳ではなく、取引のすべてを詳細に記入する重要な帳簿と考えた。したがって、この日記帳へは、現金帳、手形帳、送状控帳等の補助簿から知り得る情報のすべてを要約的に記入する努力がなされているのである。マルシュは、仕訳帳について次のように記述している。「この帳簿には、日記帳に記録されたすべての取引の債務者と債権者の名前を示す。なぜなら日記帳から元帳へ転記する目的があるからである。すべての簿記の科学は仕訳帳に含まれている。<sup>(19)</sup>」

マルシュは、仕訳帳の役割は、日記帳に記入された詳細な取引内容を、勘定科目を使って左側・借方に、右側・貸方に分けて記録することと考えた。したがって、仕訳帳とは、日記帳に記録された取引を元帳で示すことができるように、取引内容を整理し、仲介するための帳簿と解釈することができる。

元帳については、次のように述べている。「この帳簿は、すべての我々の債務者と債権者の勘定を示す。この帳簿の記入事項は、仕訳帳から転記されている。この帳簿の大きなそして唯一の目的は、我々のビジネスにおけるすべての人、財産、物の結果を示すことにある。ビジネスの始まりから今日まで、人または物が我々に負っている、または我々が負っているすべての合計は、この帳簿の適当な箇所に見られる。<sup>(20)</sup>」

「基礎的記入の規則」(Rules for original entries) では、それぞれの帳簿に記入する方法について次のように論述している<sup>(21)</sup>。

1. 商品を買入れるときは、送状控帳にその勘定書 (bill) を写すべし。
2. 商品を売るときは、売上帳に売上げた品物を記録すべし。
3. 現金を受取るときは、現金帳に記載すべし。
4. 現金を支払うときは、現金帳に記載すべし。
5. 手形を受取るときは、手形帳に記載すべし。
6. 手形を与えるときは、手形帳に記載すべし。
7. 手形を引受けるときは、手形帳に記載すべし。
8. 手形を引出すときは、手形帳に記載すべし。
9. 手紙を書くときは、書簡帳に記載すべし。

10. 下受で商品を売上げるときは、売上帳と下受売上帳に記載すべし。
11. すべてのあなたのビジネスの取引は、日記帳に記入すべし。
12. あなたの日記帳の記録を遂行するには、その取引に対して他人がなしたことよりも、あなたがなしたことを簡潔にかつ明瞭に記載すべし。

残高試算表について、マルシュは次のように説明している。「残高試算表は、元帳の結果の外観を示す表である。それは元帳に示されたすべての勘定残高の集合体である。2つの欄からなり、1つは借方欄であり、もう1つは貸方欄である。<sup>(22)</sup>」

残高試算表には、左側・借方に資産勘定残高が、そして右側・貸方に負債・資本勘定残高が記録される。そして借方と貸方の合計金額の一致をもって、仕訳帳から元帳への転記の正確性を検証しているのである。

マルシュは、バランス・シートについて次のように論述している。「帳簿の締切に際し、我々が注目する第1の目的はバランス・シートである。このバランス・シートは、2つの表からなり、我々の経営活動の結果を示すものである。貸借対照表は、資産と負債を表し、損益計算書は損失と利益を表す。その結果として、純資本金と純利益を示すのである。<sup>(23)</sup>」

通常、会計学上バランス・シートと呼ぶ時は、貸借対照表を示す。しかしマルシュの簿記法においては、バランス・シートと言うと貸借対照表と損益計算書の2つの表を意味する。そして貸借対照表については、「我々の資産及び負債の残高表」(Balance of our Assets and Liabilities)と呼び、損益計算については、「我々の利益及び損失の残高表」(Balance of our Profit and Losses)と呼んでいるのである。

## II 複式簿記書の例題

複式簿記書の例題は、2つの形態の帳簿組織が作成されている。第1は、日記帳 (Day Book)、仕訳帳 (Journal) そして元帳 (Ledger) の三帳簿制であり、第2は仕訳日記帳 (Journal and Day-Book) と元帳の二帳簿制である。

ここでは、パチョーリも論述した日記帳、仕訳帳そして元帳を中心とする三帳簿制の例題を解説する。すべての取引は、まず日記帳に記入される。Thomas Blanchardが、現金(預け金) 26,000ドル、手形2,000ドル、計28,000ドルを、C.C. Marshが現金(預け金) 12,000

ドル、手形2,670ドル、商品3,125ドル、Charles Lawrenceの勘定残高140ドル、計17,935ドルを出資したことに始まる。日記帳に記録されたすべての項目は、仕訳帳へ移記される。仕訳帳では、日記帳に記録された詳細な内容が整理され、左側・借方と右側・貸方に分けて示される。例えば、日記帳の第1取引は、仕訳帳では左側・借方(Dr.)諸口、現金38,000ドル、受取手形4,670ドル、商品3,125ドル、Charles Lawrence 140ドル、計45,935ドル、右側・貸方(To)、Thomas Blanchard 28,000ドル、C.C. Marsh 17,935ドル、計45,935ドルとして示されている。

仕訳帳の項目は、すべて元帳へ転記されている。元帳には、資本金としてのThomas BlanchardとChristopher C. Marshの人名勘定、現金勘定、商品(Merchandise)勘定、受取手形(Bills Receivable)勘定、支払手形(Bills Payable)勘定、備品(Store Fixtures)勘定、割引と利息(Discount and Interest)勘定、Schooner Josephine、Charles Lawrence、S.H. Lovell、Walter Howard等の人名勘定、営業費(Store Expenses)勘定、手数料(Commission)勘定、為替(Exchange)勘定、ボストンへの船積(Shipment to Boston)勘定、第2会社商品(Company 2 Merchandise)勘定、ニュー・オルリーズへの船積(Shipment to New Orleans)勘定、プリンス港への船積(Shipment to Port au Prince)勘定、保険(Insurance)勘定、損益(Profit and Loss)勘定、残高(Balance)勘定等が示されている。

元帳の期末決算は、残高試算表、資本金勘定であるThomas Blanchard勘定及びC.C. Marsh勘定、残高勘定、損益勘定等で遂行される。まず元帳の全ての勘定残高が残高試算表に集められる。そして左右貸借合計金額(58,114.11ドル)の一致をもって、仕訳帳から元帳への転記の正当性が証明される。

まず、損益勘定に損益諸項目が集められる。そして損益勘定の貸借差額8,547ドル22が純利益としてBlanchardとMarshに、半額の4,273.61ドルがそれぞれ振替えられる。すなわち、損益勘定から資本金勘定への振替である。そして残高勘定に、すべての資産、負債そして資本勘定が集められる。この残高勘定と損益勘定、残高試算表を基に、貸借対照表と損益計算書が作成されている。

貸借対照表の左側・借方には資産勘定が、右側・貸方には負債・資本勘定が示されている。損益計算書の左側・借方には費用勘定と純利益が、右側・貸方には収益勘定が示されている。そして純利益の8,547.22ドルは、投資額の大小に関係なく、BlanchardとMarshに

半額の4,273.61ドルずつが配分されている。さらに損益計算書の左側・下段には、現在の資本金52,120.37ドルから旧資本金43,573.15ドルを差引き純利益8,547.22ドルを算出している。これは損益計算書で示された収益－費用＝純利益という損益法によって算出された純利益の額と貸借対照表で算出された期末資本－期首資本＝純利益の額の一致をもって純利益の額の正確性を検証しているのである。

第4図 複式簿記書の日記帳

ニューヨーク、1858年1月5日

1

Thomas Blanchard と Christopher C. Marsh は、今日1日の契約の条項の通り、会社に対して、資本金として次のごとく出資した。		
Thomas Blanchard 出資		ドル
現金	-----預ケ金-----	26,000.00
No.1 手形、手形帳の通り	-----	2,000.00
C.C. Marsh 出資		
現金	-----預ケ金-----	12,000.00
No.2 手形、手形帳の通り	-----	2,670.00
商品、送状控帳1フォルダの通り	-----	3,125.00
Charles Lawrence、勘定残高	-----	140.00
		17,935 00
		45,935 00
〃		
当社は数人の人々に償還すべき次のような個々の手形を引き受ける。手形帳は次の通り。		ドル
No.1 手形. Thos. Blanchard,	-----	1,080.00
No.2 手形. C.C. Marsh,	-----	1,230.00
		2,310 00
7 備品(買入)の手形のため、W. Wharton に現金を支払った。		
	-----	300 00
8 60日の掛で Paul Harris に商品を売上げた、		
売上帳1フォルダの通り、	-----	325 00
10 No.3、30日限度の手形で、William Blakeley に商品を売上げた、		
売上帳1フォルダの通り。	-----	500 00
12 現金で S.H. Lovell に商品を売上げた、		
売上帳1フォルダの通り、金額合計	-----	125 00

13	1 売上帳の通り、Oliver Otis 商会へ商品を売上げた。 今月の19日に支払う。 半分は現金、半分は30日限度の手形 -----	2,000 00
14	1 30日の掛でHenry Austinより商品を買入れた、 送状控帳1フォルダの通り -----	1,500 00
〃	1 現金でRogers兄弟会社から商品を買入れた、 送状控帳2フォルダの通り -----	800 00
8	1 90日限度、No.3の我々の手形で、Rogers兄弟会社から 商品を買入れた、送状控帳の通り -----	2,100 00

第5図 複式簿記書の仕訳帳

ニューヨーク、1月5日、1858年

1

	借方(Dr.)諸口	貸方(To.)諸口	ドル
2	現金 -----	38,000.00	
5	受取手形 -----	4,670.00	
4	商品 -----	3,125.00	ドル
10	Charles Lawrence -----	140.00	45,935 00
1	貸 Thomas Blanchard -----	28,000.00	
1	〃 C.C. Marsh -----	17,935.00	45,935 00
6	借方 諸口	貸方 支払手形	
1	Thomas Blanchard -----	1,080.00	
1	C.C. Marsh -----	1,230.00	2,310 00
6	借方 備品		
2		貸方 現金 -----	300 00
10	借方 Paul Harris		
		貸方 商品 -----	325 00
5	借方 受取手形		
4		貸方 商品 -----	500 00
2	借方 現金		
4		貸方 商品 -----	125 00
11	借方 Oliver Otis 商会		
4		貸方 商品 -----	2,000 00

4	借方 商品	14					
11				貸方 Henry Austin---		1,500	00
4	借方 商品	2			貸方 現金-----	800	00
6	借方 商品	16			貸方 支払手形--	2,100	00

第6図 複式簿記書の元帳

1 借方(Dr.)				Thomas Blanchard				貸方(Cr.) 1			
1858	日		ドル	1858	日		ドル				
1月	5	貸方(Tb)支払手形-----	1 1,080 00	1月	5	借方(Dr.)諸口-----	1 28,000 00				
4月	15	〃 諸口-----	9 543 20	4月	30	〃 利息-----	11 493 66				
〃	30	〃 残高-----	12 31,144 07	〃	30	〃 損益-----	12 4,273 61				
			32,767 27				32,767 27				
1858	3月	30	現金-----	14 198 23	1858	4月	30	残高-----	31,144 07		

借方				Christopher C. Marsh				貸方			
1858	日		ドル	1858	日		ドル				
1月	5	貸方 支払手形-----	1 1,230 00	1月	5	借方 諸口-----	1 17,935 09				
3月	25	〃 現金-----	7 300 00	4月	30	〃 利息-----	11 297 60				
4月	30	〃 残高-----	12 20,976 30	〃	30	〃 損益-----	12 4,273 61				
			22,506 30				22,506 30				
1858	3月	30	貸方 現金-----	14 300 00	1858	4月	30	借方 残高-----	20,976 30		

19 借方				残 高 1858年 4月 30日				貸方 19			
1858	日		ドル	1858	日		ドル				
4月	30	貸方 現金-----	12 26,274 07	4月	30	借方-----	12 4,137 11				
〃	30	〃 商品-----	12 15,000 00	〃	30	〃 Paul Harris-----	12 4,988 20				
〃	30	〃 受取手形-----	12 6,998 35	〃	30	〃 Thomas Blanchard----	12 31,144 07				
〃	30	〃 備品-----	12 270 00	〃	30	〃 C.C. Marsh-----	12 20,976 30				
〃	30	〃 Schooner Josephine--	12 5,000 00								
〃	30	〃 Charles Lawrence	12 167 31								
〃	30	〃 S.H. Lovell-----	12 395 00								
〃	30	〃 Walter Howard-----	12 307 62								
〃	30	〃 ボストンへの船積	12 3,500 00								
〃	30	〃 第2会社商品----	12 3,333 33								
			61,245 68				61,245 68				

8 借方				損 益				貸方 8			
1858	日		ドル	1858	日		ドル				
2月	9	貸方 William Blakely	3 100 00	3月	30	借方 第1 会社商品	8 619 88				
	13	〃 諸 口	4 250 00	4月	27	〃 現 金	10 1,700 00				
4月	21	〃 現 金	10 120 00	〃	27	〃 現 金	10 530 00				
〃	30	〃 諸 口	12 1,305 29	〃	30	〃 諸 口	12 7,472 63				
〃	30	〃 諸 口	12 8,547 22								
			10,322 51				10,322 51				

第7図 複式簿記書の残高試算表

借方				1858年 4月 30日				貸方			
		ドル				ドル					
3	現 金	26,274 07	1	T. Blanchard	26,870 46						
4	商 品	11,437 14	1	C.C. Marsh	16,702 69						
5	受取手形	6,998 35	6	支払手形	4,137 11						
6	備 品	300 00	8	損 益	2,379 88						
7	割引と利息	612 53	9	手 数 料	782 79						
7	Schooner Josephine	4,126 00	9	為 替	164 76						
8	営業費	662 76	10	P. Harris	4,988 20						
10	C. Lawrence	167 31	16	ニュー・オルリーズへの船積	197 78						
12	S.H. Lovell	395 00	16	プリンス港への船積	1,890 44						
13	W. Howard	307 62									
16	ボストンへの投資	3,500 00									
18	第2 会社商品	3,333 33									
		58,114 11				58,114 11					

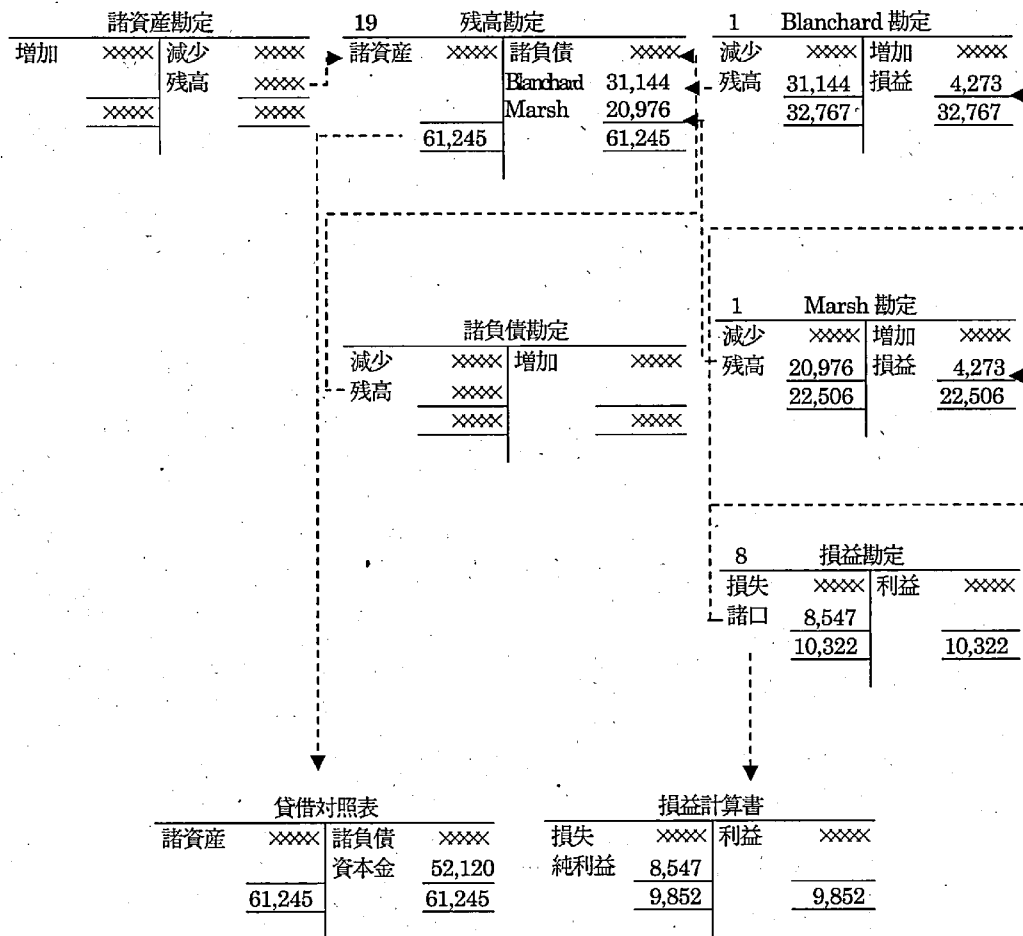
第8図 複式簿記書の貸借対照表

借方				貸方			
		ドル				ドル	
3	現金, 手許残金	26,274 07	6	支払手形 支払い残高	4,137 11		
4	商品, 棚卸手許残金	15,000 00	10	Paul Harris 支払い残	4,988 20		
5	受取手形 手許残金	6,998 35		Thomas Blanchard's			
6	備品, 価値	270 00		資本持分 31,144・07			
7	Schooner Josephine, 素価	5,000 00		C.C. Marsh's			
10	Charles Lawrence, 受取金	167 31		資本持分 20,976・30			
12	S.H. Lovell, 受取金	395 00		純資本 .....	52,120 37		
13	Walter Howard, 受取金	307 62					
16	ボストンへの船積, 売上勘定なし	3,500 00					
18	第2 会社商品, 手許3分2原価	3,333 33					
		61,245 68				61,245 68	

第9図 複式簿記書の損益計算書

借方		損益計算書				貸方	
		ドル				ドル	
6	備品 原価の10%減	30	00	4	商品,	販売益	3,562 86
7	割引と利息 損失……	612	53	5	Schooner Josephine	益	874 00
8	営業費 損失……	662	76	8	損益	益	2,379 88
	Thomas Blanchard's			9	手数料	益	782 79
	純利益の50% 4273.61			9	為替	益	164 76
	C.C. Marsh's			16	ニュー・オールーンズへの船積	益	197 78
	純利益の50% 4273.61			16			
	純利益	8,547	22		プリンス港への船積	益	1,890 44
		9,852	51				9,852 51
貸借対照表の証明				ニューヨーク, 1858年4月30日 John Smis 簿記係			
26,870.46 Blanchard 残高							
16,702.69 Marsh 残高							
43,573.15 旧純資本金							
8,547.22 上述の純利益							
52,120.37 現在の純資本							

第10図 複式簿記書の決算概略図<sup>(24)</sup>





## 第4節 銀行簿記書

### I 銀行簿記書の構造

銀行簿記書は、大きく前半の解説部分と簡単な第1例題、そして後半の主要な第2例題に分類することができる。解説部分では、複式簿記書で論述されたと同様の複式簿記の貸借原理、帳簿組織、決算に必要な残高試算表、貸借対照表そして損益計算書等の説明がなされている。そして銀行簿記書の簡単な第1例題は、後述するように、明治6年出版のわが国の『銀行簿記精法』と大きな関係を有するのである。後半の重要な第2例題は、銀行簿記組織の重要な例題としての、価値を持つものである。

銀行簿記書の貸借の7つの規則は、複式簿記書の7つの規則とほぼ同様である。相違点は、第3と後半の第4の規則である。複式簿記書の第3規則が「どのような取引でも、借方または貸方の生じないものは、その価値はなし。」としたのに対し、銀行簿記書の第3規則は「商人のセンスにおいて、どのような取引でも、借方または貸方の生じないものは、その価値はなし。」と記述している。すなわち、銀行簿記書は、「商人のセンスにおいて」という言葉を挿入したのである。第4規則では、複式簿記書が、物の価値は、ドルとセントをもって計り、物の重量と分量は、ポンド、フィートそしてヤードをもって測る。」と記述したのに対し、銀行簿記書では、「借方と貸方の生じない取引は発生しない。」という文章に替えたのである。

次に銀行簿記書における貸借原理の7つの規則について記述しておく<sup>(25)</sup>。

- 第1. 「総て借りる者を以って借方 (debtors) と言うのではなく、独りこれを我に借りる者を以って借方とする。」
- 第2. 「総て貸す者を以って貸方 (creditors) と言うのではなく、独りこれを我に貸す者を以って、貸方とする。」
- 第3. 「商人のセンスにおいて、どのような取引でも、借方または貸方の生じないものは、その価値はなし。」
- 第4. 「借方と貸方の生じない取引は発生しない。」
- 第5. 「借方と貸方という用語は、ただ人とか人々 (parties) に用いるのみならず、品物及び (取引の) 原因にも応用されるのである。」

第6. 「取引をする者は、借方なければ貸方なく、貸方なければ借方はないのである。」

第7. 「借方の合計と貸方の合計は、等しいかバランスがとれていなければならない。」

マルシュは、銀行取引に必要な主要会計帳簿として仕訳帳と元帳を解説している。そして補助簿として、預金元帳 (Deposit Leger)、総合現金帳 (General Cash Book)、株式元帳 (Stock Ledger)、割引帳 (Discount Book)、現金支払帳 (Paying Teller)、現金受取帳 (Receiving Teller)、申込帳 (Offering Book)、振替帳 (Transfer Book)、分割払名簿 (Instalment List)、引受拒絶名簿 (Instalment List)、銀行手形記録簿 (Bank Note Register) 等を説明している。さらに独立帳簿として、覚え書き帳 (Book of Minutes)、計算帳 (Statement Book)、継続元帳 (Standing Ledger)、在庫帳 (Book of Stocks)、備忘録帳 (Tickler Book)、現金係・両替係 (Cashier's Exchanger's) 等6冊が示されている。

## II 銀行簿記書の第1例題

銀行簿記書の簡単な第1例題では、銀行業務の取引例、仕訳帳、元帳、残高試算表等の例題と解説が示されている。10の取引例に基づいて、仕訳帳と元帳が作成されているが、元帳には現金 (Cash)、株主 (Stockholders)、不動産 (Real Estate)、国債 (Government Stocks)、損益 (Profit and Loss)、預金者 (Depositors)、流通手形 (Circulation)、受取手形 (Bills Receivable)、割引 (Discount) 等9つの勘定科目と金額が計上されている。

さらに、決算において貸借差引残高がゼロとなった受取手形を除く8つの勘定科目の残高金額が残高試算表 (Leger Balances) に集められている。このマルシュの銀行簿記書に記述されたこの貸借の7つの原則と簡単な銀行簿記の例題は、明治6年 (1873年) 12月に出版された『銀行簿記精法』に大きな影響を与えていたのである。

わが国の国立銀行条例は、明治5年 (1872年) 8月に制定され、11月に発布された。そして明治6年 (1873年) 6月11日には、第一国立銀行の創設総会が開かれ、7月20日には開業の免許が出され、8月1日から営業が開始された<sup>(26)</sup>。この第一国立銀行の経営のためには、正式な欧米の会計制度の採用が急務であった。そこで大蔵省は、会計に精通していたスコットランド人のアレクサンダー・アラン・シャンド (Alexander Allan Shand) を雇入れ、銀行簿記の編集と執筆に当たらせた<sup>(27)</sup>。

アラン・シャンドは、この要請に応じて、ごく短期間に、英文による『銀行簿記精法』を書き上げたのである。そしてシャンドの記述した英文を、海老原濟と梅浦精一が翻訳し、小林雄七郎、宇佐川秀次郎、丹吉人が刪補校正した。そして、この作業は芳川顯正の責任で遂行された。まず『銀行簿記精法』で論述された貸借の6つの原則のうち、4つの原則はマルシュ銀行簿記書の7つの原則から引用されたものである<sup>(28)</sup>。残りの2つは内容的には異なるものの、この貸借6つの原則が、マルシュの銀行簿記書を参照されたことは明らかである。もちろん、マルシュの複式簿記書の貸借の原則とも類似点を有する。

さらに、『銀行簿記精法』に作成された簡単な銀行簿記の例題は、マルシュの銀行簿記書の例題をそのまま引用したものである。『銀行簿記精法』には、7つの仕訳例が作成され、この仕訳例に基づいて元帳が作成されている。この元帳には、8つの勘定科目が示されている。

そしてマルシュ銀行簿記書には、10の仕訳例が作成され、この仕訳例に基づき元帳が作成され、この元帳には9つの勘定科目が示されている。そして驚くべきことに、『銀行簿記精法』の7つの仕訳例は、勘定科目と金額がすべてマルシュ銀行簿記書の10の仕訳例のうち7つ仕訳例とまったく同様なのである。したがって元帳についても、『銀行簿記精法』の8つ勘定科目は、マルシュ銀行簿記書の9つの勘定科目のうち損益勘定を除いた8つの勘定科目と同様である<sup>(29)</sup>。アラン・シャンドが、『銀行簿記精法』執筆にあたり、マルシュ銀行簿記書の一部を無断で引用したことは明らかと思われる。

第11図 マルシュの銀行簿記書第1例題仕訳帳

1855年3月1日

		ドル	
1	現金	借方 (Dr.)	100,000 --
2		貸方 (To) 株主-----	100,000 --
		2	
3	不動産	借方	10,000 --
1		貸方 現金-----	10,000 --
		3	
3	不動産	借方	1,000 --
1		貸方 現金-----	1,000 --
		4	
4	公債証書	借方	50,000 --
1		貸方 現金-----	50,000 --
		5	
5	損益	借方	500 --
1		貸方 現金-----	500 --
		6	
1	現金	借方	5,000 --
6		貸方 預金者-----	5,000 --
		7	
1	現金	借方	20,000 --
7		貸方 流通手形-----	20,000 --
		8	
8	受取手形	借方	2,000 --
6		貸方 預金者----- 1,979 -----	
9		〃 割引----- 21 -----	2,000 --
		9	
1	現金	借方	2,000 --
8		貸方 受取手形-----	2,000 --
		10	
1	現金	借方	750 --
4		貸方 公債証書-----	750 --

第12図 銀行簿記書第1例題元帳

借方(DR.)			現金			貸方(CR.)1					
3月	1日	貸方(Tb)	株主	ドル	100,000	3月	2日	借方(By)	不動産	ドル	10,000
	6日	〃	預金者		5,000		3日	〃	不動産		1,000
	7日	〃	流通手形		20,000		4日	〃	公債証書		50,000
	9日	〃	受取手形		2,000		5日	〃	損益		500
	10日	〃	公債証書		750						
			66,250		127,750				61,500		
借方			株主			貸方 2					
						3月	1日	借方	現金	ドル	100,000
借方			不動産			貸方 3					
3月	2日	貸方	現金	ドル	100,000						
	3日	〃	現金		1,000						
借方			公債証書			貸方 4					
3月	4日	貸方	現金	ドル	50,000	3月	10日	借方	現金	ドル	750
			49,250								
借方			損益			貸方 5					
3月	5日	貸方	現金	ドル	500						
借方			預金者			貸方 6					
						3月	6日	借方	現金	ドル	5,000
							〃	〃	受取手形		1,979
									6,979		
借方			流通手形			貸方 7					
						3月	7日	借方	現金	ドル	20,000
借方			受取手形			貸方 8					
3月	5日	貸方	諸口	ドル	2,000	3月	9日	借方	現金	ドル	2,000
借方			割引			貸方 9					
						3月	8日	借方	受取手形	ドル	21

次にわが国の『銀行簿記精法』に示された元帳の残高勘定から残高試算表を作成し、これをマルシュの銀行簿記書に示された残高試算表と比較することにより、両者の類似点を明らかにしたい。

第13図 「銀行簿記精法」の元帳から作成した残高試算表

借方		貸方	
金銀之部	六七〇〇〇	株主之部	一〇〇〇〇〇
地所之部	一〇〇〇〇	金預人之部	六九七九
公債証書之部	五〇〇〇〇	紙幣之部	二〇〇〇〇
		割引勘定之部	二一
	一二七〇〇〇		一二七〇〇〇

第14図 マルシュ銀行簿記書第1例題の残高試算表

借方				貸方			
		ドル				ドル	
1	現金	66,250	..	2	株式所有者	100,000	..
3	不動産	11,000	..	6	預金者	6,979	..
4	公債証書	49,250	..	7	流通手形	20,000	..
5	損益	500	..	9	割引	21	..
		127,000	..			127,000	..

銀行簿記書は、損益項目を削除しているので、一部金額の異なる所があるも、両者の勘定科目と金額は、ほぼ同じである。しかし、なぜアラン・シャンドがマルシュの銀行簿記書の例題に依存したのか、またなぜ依存した銀行簿記書の名前を明らかにしなかったのかは不明である。

### Ⅲ 銀行簿記書の主要例題（第2例題）

簡単な銀行簿記の第1例題の後に、取引手順(Routine of Business)が解説されている<sup>(30)</sup>。

ここでは、銀行簿記の詳細な取引例とその仕訳例が記述され、元帳の資本金勘定における株主名明細目録や預金勘定の預金者明細目録等が論述されている。そして、最後の決算時における残高試算表、貸借対照表及び損益計算書が作成されている。そしてこの残高試算表、貸借対照表そして損益計算書は、後に示される重要な主要例題である仕訳帳と元帳の財務諸表である。このように、先に財務諸表を作成しておいて、後で仕訳帳と元帳（複式簿記の場合は、日記帳、仕訳帳、元帳）を示す方法は、複式簿記書の場合と同様である。

次に、マルシュ銀行簿記書の主要例題（第2例題）について解説する。まず、銀行簿記取引に対して、仕訳帳と元帳が作成されている。複式簿記書が、日記帳、仕訳帳及び元帳

の三帳簿制を採用したのに対し、銀行簿記書では仕訳帳と元帳の二帳簿制を採用したのである。したがって、すべての取引は、初めに仕訳帳へ記入される。まず、現金125,057.13ドルを資本金として受取ることになる。ただし、割引と利息として57.13ドルが差引かれるので、差額の125,000ドルが資本金として記録される。仕訳帳は、伝統的な左右対照の勘定形式で示されている。貸借用語は左側の借方はDr.で、右側の貸方はToで表されている。ただし、勘定科目が2つ以上ある場合は、諸口 (Sundries) をもって総括し、下に正式な勘定科目名を示している。仕訳帳に記入されたすべての勘定が元帳へ転記されている、元帳の左側・借方はDR. で、右側・貸方はCR. で表されている。

元帳の勘定科目は、現金 (Cash) 勘定、資本金 (Capital Stock) 勘定、割引と利息 (Discount and Interest) 勘定、不動産 (Real Estate) 勘定、受取利息 (Bill Receivable) 勘定、家具 (Furniture) 勘定、預金者 (Depositors) 勘定、為替 (Exchange) 勘定、流通手形 (Circulation) 勘定、諸経費 (Expenses) 勘定、支払給料 (Salaries) 勘定、損益 (Profit and Loss) 勘定、ニューヨーク市株式 (New York State Stocks) 勘定、ペンシルバニア銀行 (Bank of Pennsylvania) 勘定、バルチモア銀行 (Bank of Baltimore) 勘定、ピッツバーグ銀行 (Bank of Pittsburg) 勘定他等の勘定が示されている。

マルシュ銀行簿記書の元帳決算は、元帳の各勘定科目の残高、損益勘定、残高試算表等によって遂行される。損益勘定の利益と損失の差額を純利益として算出するが、その差額を資本金勘定へ振替えるという伝統的な決算方法は行われていない。損益勘定が設けられ、損益項目が集められているが、残高勘定は設けられていない。すなわち、集合損益勘定はあるが、集合残高勘定はないのである。その代わりに、損益計算書勘定項目と貸借対照表勘定項目を集める残高試算表が作成され、左右貸借の合計金額の一致をもって、仕訳帳から元帳への転記の正当性を示すとともに、損益計算書及び貸借対照表作成の一資料としているのである。すなわち、貸借対照表と損益計算書は、残高試算表を参照しつつ、元帳勘定の残高から直接に作成するという手続方法を採用している。したがって、この銀行簿記書の決算手続の方法は、複式簿記書の方法と若干の相違がある。ただし、貸借対照表と損益計算書の表示方法については、銀行簿記書も複式簿記書も、ほぼ同様である。

銀行簿記書の貸借対照表は、Balances of Assets and Liabilitiesであり、複式簿記書の貸借対照表は、Balances of our Assets and Liabilitiesである。そして銀行簿記書の損益計算書は、

Balances of Profits and Lossesであり、複式簿記書の損益計算書は、Balances of our Profits and Lossesである。そして、銀行簿記書も商業簿記書とともに、貸借対照表及び損益計算書の二つの表を、バランス・シート (Balance Sheet) と総称しているのである。

第15図 銀行簿記書主要例題の仕訳帳

ニューヨーク 1855年6月30日 1

1	現金	借方(Dr.)	貸方(To.)	諸口			ドル	
				次のごとき勘定で現金受取 現金帳1フォートの通り、3月10日			125,057	13
2	貸	資本金			ドル	125,000	--	
2	〆	割引と利息				57	13	125,057 13
1	諸口	借方	〆	貸方	現金			
					次のごとき勘定で現金支払 現金帳1フォートの通り、3月10日			
3	不動産					10,015	--	
3	ニューヨーク株式					110,776	25	120,791 25
					7月12日			
4	受取手形	借方	〆	貸方	諸口			38,000
					当日割引した手形の額、割引帳 1フォートの通り			
5	貸	預金者				37,451	74	
2	〆	割引				548	26	38,000 --
1	現金	借方	〆	貸方	諸口			
					次のごとき勘定で現金受取			
2	貸	資本金				98,750	--	
	〆	預金者				58,015	--	
	〆	ニューヨーク株式				1,500	--	
	〆	流通手形				8,750		167,015

ニューヨーク 1855年7月16日

1	諸口	借方	〆	貸方	現金			ドル
					次のごとき勘定で現金支払 現金帳1フォートの通り			29,900
5	預金者					27,800	--	
3	不動産					1,200	--	
4	家具					700	--	
7	諸経費					200		29,900



1	現金	借方	18	貸方	諸口			
	次のごとき勘定で現金受取							
	現金帳270-1財の通り							
6	貸	流通手形				9,250	--	
5	〃	預金者				14,870	--	24,120
5	預金者	借方	〃					11,710
	預金者の勘定で現金支払							
	現金帳270-1財の通り							
1	貸方	現金						11,710
4	受取手形	借方	19	貸方	諸口			62,850
	当日の割引手形、割引帳							
	270-1財の通り							
5	貸	預金者	額			62,043	76	
2	〃	割引	額			806	24	62,850
			24					

第16図 銀行簿記主要例題の元帳

2 借方(DR.)				資本金				貸方(CR.)			
1855年				ドル		1885年				ドル	
10月	31日	To 残高		250,000		6月	30日	By 現金	1	125,000	
						7月	16日	〃現金	1	98,750	
						〃	25日	〃現金		26,250	
				250,000						250,000	
						10月	31日	By 残高		250,000	

借方				不動産				貸方 3			
1855年				ドル		1885年				ドル	
6月	30日	To 現金	1	10,015		9月	30日	By 現金	7	500	
7月	16日	〃現金	2	1,200		10月	31日	〃残高		11,215	
10月	31日	〃損益	10	500						11,715	
				11,715						11,715	
10月	31日	To 残高		11,215							

借方				諸経費				貸方 7			
1855年				ドル		1885年				ドル	
7月	16日	To 現金	2	200		10月	14日	By 現金	8	26 62	
8月	12日	〃現金	4	79 25		〃月	31日	〃損益	10	348 50	
〃月	24日	〃現金	5	50							
9月	30日	〃現金	7	20							
10月	14日	〃現金	9	25 87							
				375 12						375 12	

借方				支払給料				貸方			
1855年				ドル			1885年			ドル	
8月	12日	To 現金	4	316	64	10月	31日	By 損益	10	1,633	28
9月	30日	〃現金	7	1,316	64						
				1,633	28					1,633	28

12 借方				損 益				貸方			
1855年				ドル			1885年			ドル	
7月	30日	To 現金	3	10	--	10月	31日	By 諸口	10	16,908	32
10月	31日	〃諸口	10	2,041	78						
〃月	31日	〃配当金 No.1	10	10,000	--						
〃月	31日	〃残高		4,856	54						
				16,908	32					16,908	32
						10月	31日	By 残高		ドル	4,856 54

第17図 銀行簿記書主要例題の残高試算表

借方				貸方			
		ドル				ドル	
1	現 金	261,555	72	2	資本金	250,000	
3	不 動 産	10,715		5	割引・利息	3,441	71
3	ニューヨーク市株式	107,776	25	6	預金者	197,853	55
4	受取手形	93,525		6	流通手形	71,000	
4	備 品	1,200		10	為替	299	28
7	諸 経 費	348	50	13	都市銀行チャールストン	270	
8	ペンシルバニア銀行	8,670			パナマ鉄道株式	9,667	33
8	バルチモア銀行	16,010		15			
9	ピッツバーク銀行	2,750					
14	損 益	10	17				
7	支払給料	1,633	28				
10	ボストン市銀行	7,230					
11	ニカラガ運送株式	10,000					
12	Bullion	11,108	12				
		532,531	87			532,531	87

第18図 銀行簿記書主要例題の貸借対照表

借方				貸方				
1	現金	手許残高	ドル 261,555	72	5	預金者 残高	ドル 197,853	55
3	不動産	原価	11,215		6	流通手形 残高	71,000	--
3	ニューヨーク市株式	原価	110,776	25	10	都市銀行チャールストン 残高	270	
4	受取手形	割引手形	93,525			負債合計	269,123	55
4	備品	5%減価	1,140			資本金 支払	250,000.00	
8	ペンシルバニア銀行	残高	8,670			純利益	14,856.54	
8	バルチモア銀行	残高	16,010			残高 当期資本金	264,856	54
9	ピッツバーグ銀行	残高	2,750					
10	ボストン市銀行	残高	7,230					
11	ニカラガTransit 株式	原価	10,000					
12	Bullion	原価	11,108	12				
		総資産	533,980	09			533,980	09

第19図 銀行簿記書主要例題の損益計算書

借方				貸方				
4	備品	5%控除	ドル 60		2	割引・利息	利益 3,441	71
7	諸経費	損失	348	50	3	地所	利益 500	
7	損益	損失	10		3	ニューヨーク市株式	利益 3,000	
12	支払給料	損失	1,633	28	6	為替	利益 299	28
		総損失	2,051	78	17	パナマ鉄道株式	利益 9,667	33
	残高	純利益	14,856	54				
			16,908	32		総利益	16,908	32

## 第5節 銀行簿記書と複式簿記書の比較

次にマルシュの銀行簿記書と複式簿記書の類似点と相違点を指摘してみる。

### I. 類似点

- (1) 銀行簿記書と複式簿記書は、文献全体の構成が類似している。
- (2) 2冊とも元帳決算において、残高試算表が作成され、活用されている。
- (3) 2冊の取引仕訳に採用されている勘定科目名に共通のものが見られる。
- (4) 銀行簿記書と複式簿記書の冒頭には、類似したダイヤグラムが作成され、このダイヤグラムの中で、それぞれ採用されている会計帳簿が示されている。
- (5) 2冊とも、財務諸表として貸借対照表と損益計算書を作成し、この2つの表をバランス・シートと総称している。
- (6) 2冊とも、先にバランス・シート、すなわち貸借対照表と損益計算書を作成しておき、後で、複式簿記書の場合は日記帳、仕訳帳そして元帳を、銀行簿記書の場合は、仕訳帳と元帳を示すという方法をとっている。
- (7) 簿記上の用語の解説文についても、共通する内容が見られる。
- (8) 銀行簿記書も複式簿記書も、ともに複式簿記を基礎とした解説書である。

### II. 相違点

- (1) 銀行簿記書が、主要帳簿として、仕訳帳と元帳の二帳簿制を採用したのに対し、複式簿記書は日記帳、仕訳帳及び元帳の三帳簿制を採用した。
- (2) 銀行簿記書が資本金 (Capital) という勘定を用いたのに対し、複式簿記書は、資本金という勘定を用いず、Thomas BlanchardとChristopher C. Marshという人名勘定を用いて資本金としての性質を持たせた。
- (3) 2冊とも、冒頭にダイヤグラムを作成して、必要な会計帳簿類を図示した。しかし、主要簿については2冊とも類似しているが、補助簿については銀行簿記書の方が、複式簿記書に比べ多く複雑である。
- (4) 複式簿記書では、損益計算書の下に貸借対照表の証明を示したが、銀行簿記書にはそ

れない。

- (5) 複式簿記書は、会計帳簿、元帳への転記、残高試算表、記入上の規則、バランス・シート、元帳の締切他等多くの事柄を文章で解説している。しかし、銀行簿記書は、文章で解説するよりも、むしろ例題で示そうとしている。

## 第6節 おわりに

マルシュは、単式簿記、複式簿記そして銀行簿記に関する簿記書を出版し、その内容を詳細に、しかも明白に解説し、例題を示した。単式簿記については、日記帳と元帳の2冊の帳簿を中心に人名勘定のみを用いて、取引上の債権・債務の関係のみを記録した。ただし、多くの補助簿を採用して、決算時には貸借対照表を作成し、資産、負債、資本金額を示した。そして期末資本から期首資本を差引くことによって純利益をも算出しているのである。この単式簿記の手法は、明治時代に福澤諭吉が翻訳した『帳合之法』の原著Bryant & Strattonの簿記書(1871年)及び加藤斌が翻訳した『商家必用』の原書Inglisの簿記書(1872年)と類似点を持つ<sup>(31)</sup>。1803年にドイツでメイスナーが解説した単式簿記とは異なる<sup>(32)</sup>。

マルシュは、複式簿記については、日記帳、仕訳帳そして元帳の三帳簿制を採用した。そして特に日記帳については、単なるメモではなく、取引のすべての情報を詳細に記入する帳簿と考えた。そしてこの3つの帳簿を通して、取引に関するすべての勘定と金額を示したのである。マルシュの帳簿組織は、パチョーリの解説したイタリア式簿記組織である。マルシュは、イタリア式簿記組織を採用したことになる。そしてマルシュは、財務諸表として、残高試算表での検証を通して、貸借対照表と損益計算書の2表を作成している。そしてこの2表をバランス・シートという名称で呼んでいる。したがって、このバランス・シートという名称には、一般的な貸借対照表のみを指す場合と、貸借対照表と損益計算書の2つの表を指す場合があったのである。

銀行簿記については、仕訳帳と元帳の二帳簿制を採用した。なぜか日記帳は採用しなかった。そして銀行取引に関するすべての取引をまず仕訳帳に記入し、仕訳帳に示された勘定と金額をすべて元帳へ転記したのである。勘定の内容は、当然のことながら、銀行取引なので単式簿記教科書や複式簿記教科書の場合と異なる。ペンシルバニア銀行勘定やバルチモア銀行勘定のように、他の簿記書に見られない勘定名が示されている。そして、財務

諸表としては、複式簿記書とほぼ同様に、残高試算表を通して、貸借対照表と損益計算書の2表を作成している。そしてこの2表をバランス・シートと呼んでいるのである。ただし、興味深いことは、この貸借対照表と損益計算書の2表のバランス・シートは、複式簿記書の場合も銀行簿記書の場合もともに、仕訳帳、元帳の前に作成されているのである。したがって、この2表は財務諸表ではなく、元帳に開設される損益・残高の両勘定の検証手段にしかすぎないという説もある<sup>(33)</sup>。しかし検証手段ならば、残高試算表だけで十分であり、何も貸借対照表と損益計算書を作成する必要はなかったのである。この表は会計報告書としての性格を持つ財務諸表と考えるべきものと思われる。

またマルシュは、複式簿記書と銀行簿記書の2冊の冒頭で、貸借の原理について、極めて簡潔な解説を試みている。その解説の方法は、借方は債務者 (debtors)、貸方は債権者 (Creditors) という人的勘定学説であった。マルシュのこの解説は、極めて解り易く、読者に複式簿記の原理を理解する上で極めて有益である。ただし、マルシュは、当然のことながら、簿記書の例題とその解説の中では、 $資産 = 負債 + 資本$  または  $資産 - 負債 = 資本$  の物的勘定学説の思想を示している。したがって、マルシュは、人的勘定学説と物的勘定学説の2つの説をもって、複式簿記の原理を説明したことになる。

そして1800年代、アメリカで出版されたマルシュの単式簿記書、複式簿記書そして銀行簿記書は、アメリカにおいては好評を博し版を重ねた。さらに日本においても、わが国の最良の簿記教科書としてまた銀行業務を含む実務界での簿記参考書として大きな役割を果たしたのである。

#### (注)

- (1) アメリカ簿記史のこの時代区分については、次の著書を参照した。久野光朗『アメリカ簿記史』同文館、昭和60年、33頁。
- (2) Stone, Williard E., *The Science of Double-Entry Book-Keeping* by CC. Marsh, *Yushodo American Historic Accounting Literature, Volume 5(b)*, Yushodo Booksellers, 1982, Editor's Preface iii.
- (3) Loc. cit.
- (4) 西川孝治郎『文献例題 日本簿記学生生成史』雄松堂書店、昭和57年、53頁参照。
- (5) この単式簿記文献の初版は1853年であるが、それ以後1855年、1859年、1861年、1864年、1868年、1871年、1876年と版を重ねている。拙著『複式簿記発達史論』大東文化大学経営研究所、2007年、384頁。
- (6) 拙著、前掲書、384頁。
- (7) 拙著、前掲書、385頁。
- (8) 筆者の所有するこの文献は、1864年版である。

- (9) 拙稿「アラン・シャンド『銀行簿記精法』に関する一考察」『経営論集』第15号、大東文化大学経営学会、2008年、43頁。
- (10) アラン・シャンド『銀行簿記精法』とマルシュの銀行簿記書の関連性の発見は、偏に白坂亨教授の業績によるものである。  
詳しくは、次の論文を参照されたい。白坂亨「『銀行簿記精法』の成立過程における問題点に関する一考察」『日本会計史学会年報』第29号、2010年。
- (11) 拙著『複式簿記発達史論』383—416頁。
- (12) Marsh, C.C., *A course of practice in single-entry book-keeping, improved by a proof or balance*, New York, 1861, p.3.
- (13) Marsh, C.C., *op.cit.*, p.12.
- (14) Marsh, C.C., *op.cit.*, p.11.
- (15) *Loc.cit.*
- (16) メイスナーの単式簿記については、拙稿「『メイスナーの簿記書』に関する一考察」『経済論集』第96号、大東文化大学経済学会、2011年を、参照されたい。
- (17) Marsh, C.C., *The Science of double-entry book-keeping, simplified by application of an infallible rule for journalizing ; calculated to insure a complete knowledge of the theory and practice of accounts* : New York, 1858, p.2.
- (18) Marsh, C.C., *op.cit.*, p.10.
- (19) *Loc.cit.*
- (20) Marsh, C.C., *op.cit.*, p.11.
- (21) Marsh, C.C., *op.cit.*, pp.12—13.
- (22) Marsh, C.C., *op.cit.*, p.24.
- (23) Marsh, C.C., *op.cit.*, p.47.
- (24) この決算における、貸借対照表、損益計算書、決算概略図については、拙著『複式簿記発達史論』大東文化大学経営研究所、2007年、406—410頁を参照。
- (25) Marsh, C.C., *The theory and practice of bank book-keeping, and joint stock accounts*, New York, 1878, p.9.
- (26) 拙稿「アラン・シャンド『銀行簿記精法』に関する一考察」44頁。
- (27) 前掲書、45頁。
- (28) 詳しくは白坂亨「『銀行簿記精法』の成立過程における問題点に関する一考察」を参考されたい。
- (29) Marsh, C.C., *The theory and practice of bank book-keeping, and joint stock accounts*, New York, pp.15—18.
- (30) Marsh, C.C., *op.cit.*, pp.21—74.
- (31) 拙著『複式簿記発達史論』235—382頁を参照。
- (32) 拙稿「『メイスナーの簿記書』に関する一考察」6—8頁。
- (33) 久野秀男著『英米（加）古典簿記書の発展史的研究』学習院、昭和54年、376—377頁。